

# Sophia-R

## Sophia University Repository for Academic Resources

Title	古典期マヤの支配概念と支配空間：カーン家の政治体制
Author(s)	郷澤, 圭介
Journal	イペロアメリカ研究
Issue Date	2010-01-29
Type	Departmental Bulletin Paper
Text Version	publisher
URL	<a href="http://digital-archives.sophia.ac.jp/repository/view/repository/00000008707">http://digital-archives.sophia.ac.jp/repository/view/repository/00000008707</a>
Rights	



上智大学  
SOPHIA UNIVERSITY

# 古典期マヤの支配概念と支配空間 カーン家の政治体制

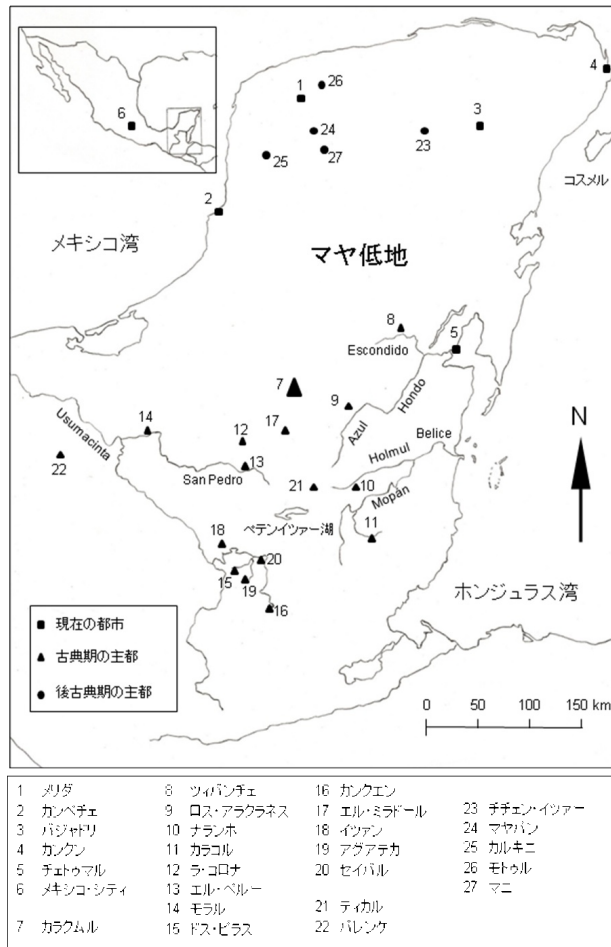
郷 澤 圭 介

## はじめに

メキシコ、ユカタン半島には紀元前からマヤ人による文明が栄え、数多くの国（政体）が割拠していた<sup>1</sup>。16世紀、スペイン人に征服されるまで、マヤ人はオルメカ文明やメキシコ中央高原で栄えた諸文明の影響は受けても他民族に文化的に吸収されず常に半島の支配者、そして住民でありつづけた。マヤ研究では、スペイン征服以前の歴史は大きく3つに分類される。先古典期（紀元前2000年～後250年）、古典期（後250年～後900または1000年）、後古典期（900または1000年～スペイン人による征服まで）である<sup>2</sup>。中でも古典期は、ティカル、パレンケはじめ多くの国が政治文化の隆盛を迎えた後、末期にマヤ低地南部が徐々に放棄されるという劇的な時代であったため、研究者の間で脚光を浴びてきた。また、古典期にはマヤ文字資料という「書かれた歴史」が存在するため、当時のマヤ政治社会組織解明の鍵としてその解読に期待がかけられた。1952年、ロシア人マヤ学者ユーリ・クノロゾフ(Yuri V. Knorosov)がマヤ文字表記システムは表音文字と表語文字の組み合わせであることを発見し、それ以降急速に文字の解読が進んだ。その結果パレンケをはじめとした主要な遺跡の歴史は次々と明らかになっていったが、一方で肝心の古典期マヤの政治社会組織に関しては、アメリカを中心とする多くの研究者が携わり、頻繁に議論が交わされているにもかかわらず現在に至るまで思うように成果が上がっていない。

以下本稿では、これまでの政治社会組織研究の問題点と、植民地期文書を活用したこれからの方法論に触れた後、マヤ社会の重要な要素である対人主義を柱とした後古典期後期の政治組織モデルを展開する。次いで、時代をさかのぼり古典期カラクムルを拠点に繁栄したカーン(Kaan)家の政治に関する考古学・碑文データから得られた情報にこの後古典期後期モデルを当てはめ、その政治体制を明らかにする。最後に、考古学・碑文データからは描くことのできない古典期農民のダイナミズムを同モデルより再現し、その有効性を確認する。

図1 ユカタン半島の地図



(出所) Gozawa (2009), p.14. (一部修正)

## I. 今までの問題点とこれからの方法論

後古典期後期の政治組織の研究のなかで、今日まで絶大ともいえる影響力を持っているのは米国のラルフ・ロイズ(Ralph L. Roys)である。彼は植民地時代にスペイン人が書いた膨大な史料、そしてそのスペイン人に自分の言語をアルファベット表記することを教えられたマヤ人が残した文書をもとにこの課題に取り組み、この時期のマヤ北部低地の政治領域図を作成した(図2)。ロイズはマヤ先住民がその最大の政体をクッチカバル(*cuchcabal*)と呼んでいたと指摘したが、著書の中ではスペイン人が用いていたプロビンシア(*provincia*)という言葉でこれを定義した。ロイズが提唱した政治領域

図は、その明瞭さから後の研究者に受け入れられ、誰も疑いを挟む余地はないように思われていた。

だが実際には、ロイズの仮説はヨーロッパ的領土概念、すなわち「国家は境界線で区切られた領土を持っている」という考えの上に成り立っていた。これは現代の我々が通常思い描く近代国家の持つ領土概念そのものであり、マヤのそれとは根本的に異なるものであった。そもそも先住民には、後述するように境界線で明確に区切られた、かつ連続する面としてとらえうる領土という概念は馴染まないものである。それを無視した、現代の研究者による「領土の面積」「境界の線引き」、具体的にはティカルの領土面積は周辺国と比べて大きかったか小さかったか、どこまでがティカルの境界線だったのかに関する議論は、政治組織研究の遅れを招くものでしかなかった。

図2 ロイズによるスペイン征服当時のユカタン半島政治領域図



(出所) Roys (1957), 図1

もっとも考古学先行の古典期政治組織研究において、「領土」が頻繁に議論されてきたのはある意味では当然であった。なぜなら、発掘から得られるデータといえは圧倒的にモノと測定数値だからである。碑文学が飛躍的に発展するまで、古典期のデータといえは考古学資料しかなく、その統計データによってマヤの政治・社会組織を解

明するしか方法がなかった。例えば建造物の体積、石碑・広場の数、居住パターンであり、そこから遺跡（都市）の規模や領土面積、人口などが推測されてきた。各遺跡で長年蓄積されてきた発掘データを分析した結果、古典期マヤの政治組織は不安定で小規模な政体が分散した非中央集権的なものであったと研究者たちは結論づけた。しかし、具体的にどのような仕組みだったのかももう一步踏み込んで論述するには、統計データだけでは足りない。そこで、別の地域の文化から借用したモデルや他分野の理論で考古学データを補強する手段がとられたのである。ヨーロッパ、西アフリカ、東南アジアなど、世界中から「魅力的な」政治組織モデルがかき集められ、さらにはティーン多角形という、隣接する主要遺跡同士の間接的に単純に直線を引きこれら直線をつなぎ合わせ、現れた多角形を遺跡（都市）の政治支配域および領土面積とみなす、あまりにも歴史文化的背景を無視した手法も一時期はその有効性が真剣に議論された<sup>3</sup>。これら他文化から取り入れたモデルを借用して考古学データを分析する際、彼らはマヤ文化独自の概念を無視し、ロイズと同じくヨーロッパ的もしくは近代的概念を尺度にしたのであった。

例えば、欧米人が「国家(state)」という言葉を使用するとき、そこにはルネサンスや宗教改革以降ヨーロッパで発展してきた政治概念が思い描かれる。すなわち国家は「共同体と領土の間に固定的関係を必要とし、国家は領土を所有し境界を定め、その国境内の土地および国民は当然のように国家に属さねばならないのである(Miller 1989:179)。つまり国家の領土と臣民はセットになっており、臣民が境界線を無視してたえず動くことは前提とされていない。今までの古典期政治社会組織研究では、前述したすぐれてヨーロッパ的な国家観に基づく固定的・排他的な政治組織像が常に念頭にあったため、マヤ人自身が築いてきた概念、宇宙観を理解する作業が疎かにされ、彼らが作り上げた組織の本質に迫ることができなかったのである。

ここでスペイン人による征服から 19 世紀初頭に終わる植民地時代のユカタン半島北部に目を向けてみたい。マヤ低地南部が放棄された後にマヤ文明の中心のひとつとなった北部低地には、先住民貴族によってアルファベット表記されたマヤ語で書かれた文書が存在する。かつての支配者マヤ貴族が享受してきた特権および自らの統治者としての正統性を、あらたな支配者スペイン人に認めさせるために書かれたものである。『カルキニ文書(Códice de Calkiní)』 『チラム・バラムの書(Libro de Chilam Balam)』 『チャク・シュルブ・チェン年代記(Crónica de Chac Xulub Chen)』 『ヤシャ村のシウ家文書(Papeles de los Xiu de Yaxá)』 他多数ある。植民地期に書かれたとはいえ、多くのマヤ人著者はスペイン侵略前に生まれ、マヤの伝統教育のもと育っているため、マヤ文書には彼らの伝統的概念が色濃く残されている。ただし、血筋の正統性を誇示する目的で家系の歴史が捏造、歪曲されているので、そこは彼らが文書を書いた背景を考慮しつつ慎重に分析する必要がある。他にもディエゴ・デ・ランダ(Diego de Landa)などフランシスコ会修道士たちがマヤ人の習慣、歴史等を記録した文書も重要な文献で

ある。そしてエンコミエンダを下賜されたエンコメンデーロたちが土地のマヤ貴族の協力を得て地元の歴史、地理などをまとめスペイン王室へ提出した現地報告書『ユカタン歴史地理報告書(Relaciones histórico-geográficas de la gobernación de Yucatán)』もまた、マヤの言説構造が残っている貴重な情報源である(大越 2003:170)。

これら豊富な植民地期文書を分析してマヤの政治社会概念を抽出し、それを古典期の考古学・碑文データに適用する。これが今回筆者が提案する研究方法である。本研究には以下の2つの方法論が使われる。ひとつは社会学においてアルフレッド・シュッツ(Alfred Schütz)が提唱する主観的解釈、もうひとつは歴史学で利用されている「アップストリーミング法(upstreaming method)」である。シュッツの主観的解釈とは、「主観的」という言葉から誤解されがちだが、これは研究者ではなく研究対象の行為者(本研究の場合マヤ人)が主観的に捉えた解釈を尊重すべき、ということの意味する。シュッツ曰く「人間の行為の科学的モデルは、現実世界に生きるひとりの行為者によってなされた行為が、本人および彼と同じ現実生きる人間に、彼らの日常の共通認識から生まれる解釈によって理解できるよう構築されなければならない」のであり、簡単に説明すれば「行為者にとっての行為の意味を発見する」ということである(Schütz 2003:77-78)。このモデル構築には数字などの統計データではなく概念、宇宙観などの質的データが重要となる。一方で「アップストリーミング法」とは、一定地域において連続性のある文化に関して、より現代に近く情報量の多い時代の情報源から概念をすくい出した上で歴史の流れを遡り、より断片的で不完全な情報源しかない時代の文化を再構築、説明するための手法である。多くの古典期マヤ研究者は、西暦800年から1050年頃に起こったいわゆる「マヤの崩壊(Classic Maya Collapse)」のイメージと、チチェン・イツァー遺跡などトルテカの影響を受けた北部建築様式とペテン地域との文化的差異に束縛され、その後文化的繁栄を遂げる後古典期北部と古典期中南部には文化的連続性がなかったと考えている<sup>4</sup>。しかし、マヤ低地という一定地域において文化や歴史は断絶していなかった。どこまでも平坦で、長距離交易網が陸海路とも網羅されていたこの半島内で、後古典期以前から栄えていたチチェン・イツァー、ツイビルチャルトゥン、ウシュマル、エツナーなどの都市とペテン地域との交流がなかったとは考えにくい。したがって、マヤ低地は南北の差を問わず、ひとつの文化圏であったと考えるべきである。

本研究では、植民地期文書研究から後古典期後期マヤの政治組織再現を試みたラルフ・ロイズ、セルヒオ・ケサーダ(Sergio Quezada)、大越翼に加え、同様の方法で社会組織を分析したナンシー・ファリス(Nancy Farriss)の研究結果をもとにマヤの領土、支配域概念を分析しひとつのモデルを構築した後、これを古典期カラクムル遺跡(カンペチェ州南東部)を拠点に繁栄したカーン家のケースに当てはめその有効性を確認する。

## II. つながりと中心

マヤ社会を語る上で重要な要素が2つある。それは1) 人と人とのつながり 2) 求心と遠心の動き、である。人と人とのつながりの重要性は、さまざまな植民地期文書からはっきりと読み取れる。同じ血族、家族同士のつながり、最高統治者と臣下や従属統治者とのつながり、そして統治者と庶民とのつながりの強さが、政治支配力の強弱を左右した。カヌル家やベッチ家のように支配域に散らばる統治者のほとんどを家族や同姓のメンバーで固めることで政治組織の団結を強化した政体は多かった。最高統治者であるハラチ・ウィニク(*halach uinic*)またはバタブ(*batab*)は、彼らに従う者に対して貢納や労働者の供出を義務付ける代わりに、彼ら従属者の統治者としての正統性を保障し支配権を安堵したり、軍事および食糧援助、カカオやヒスイ等の威信財を配るなど十分に見返りを与えた。そうすることで、互いにもちつもたれつの双務的な関係を築き、個人的なつながりを強化した(大越 2005:147)。この個人的つながりが直接政治的なつながりとなるのであった。また、庶民に対しても同様で、トウモロコシなど農作物や特産品の貢納、労働力提供の見返りとして、労働期間中後の食料・衣服の提供、祭事供物の分与などによって貢納の一部を還元した。さらに大事なことは、貴族だけが代々受け継いでいた天文学、暦、数学の知識を駆使して、農民たちに気候や天候の移り変わり、とくに雨に関わる情報を教えたことであった(Farriss 1984:143-145)。文字も読めず天文学の知識ももたない庶民は、雨神チャークを中心とした神々と交信できる貴族たちに恐れおののいた。そして支配貴族たちが主張する血統の神聖性を信じ、貢物を納めたのである。こうして相互依存の関係が成立した。

人と人とのつながりで形成された組織には必ず中心となる人物が求められる。マヤ社会では、それはハラチ・ウィニクやバタブと呼ばれる首長であった。首長の存在は、常に世界および宇宙の中心と結びついていた。彼らの世界の中心には天界と冥界を結ぶ世界樹セイバがそびえ立っているが、首長は死ぬとこのセイバを通して冥界へ降りると信じられていた。マヤの首長は地上の中心であると同時に、政治、社会、宗教などあらゆる組織の求心的存在であった。同時に、首長自身が自分が中心であると意識していたし、共同体も臣下や庶民を守り秩序を与えてくれる存在を求めたのである。

求心的関係は、大越およびケサーダが発見した最高統治者ハラチ・ウィニクを頂点とするクッチカバル、バタビル(*batabil*)、クッチテール(*cuchteel*)の3段政治組織構造に見ることができる。政治組織の最小単位であるクッチテールは、集住集落を形成することなく数軒の拡大家族が散在しつつも、ひとつの共同体意識で結ばれていた集合体である。その領域は彼らの家族の構成員がそこに居住しているかどうかによってのみ認識された<sup>5</sup>。クッチテールの代表アフ・クッチ・カブ(*ah cuch cab*)は、彼らの利益や安全を保障してくれる能力と権力のある長が統治する他のクッチテールとの関係を戦略的に求め、その過程でひとりの中心となる首長が誕生する<sup>6</sup>。こうして多くのクッチ

テールを束ねた集合体がバタビルである。バタビルの世襲統治者バタブは、自らが中心となり独立を保つか、または自分より勢力の大きい統治者の傘下に入ることで自らの支配権を安堵してもらう。こうして多くのバタビルを傘下におさめた結果成立したのが最大政治組織クッチカバルである。しかし、この求心的関係は絶対的なものではなく、絶えず不安定であった。なぜなら、最小単位のクッチテールが彼らの利益と生き残りを優先して、しばしば別のバタビルに寝返ったり、同時に 2 人のバタブに帰属してどちらに付くのが得策か様子を窺ったりしたためである。またバタビルも同様の動きを見せたため、クッチカバルにおける各バタビルとの従属関係も不安定なものであった。

一方では、同じ関係を逆の視点から捉えた、中心から周縁に向かう遠心的ベクトルも植民地期文書に見ることができる。16 世紀半ばにマヤ人によって作成された地図には首長の支配域概念とそのまなざしがよく現れている（大越 2005:145-146）。ユカタン・マヤ人の描く地図は、四角形ではなく円形であった。円の中央に首長が居住する首都が置かれ、近辺の地名が実際と同じ方角に描かれる。そして円の周縁に、支配域の限界に位置する地名が中心から等距離に描かれている。この時代の地図からは、彼らの関心が従属支配者のいる方角とおおまかな地名のみにあったことが読み取れる。首長は自分の臣下、あるいは首長との従属関係を認めた統治者がいる都市までを支配域と理解した（大越 2005:140）。つまり、物理的距離を度外視した中心から周縁への遠心的まなざしそのものが、一国の政治領域を表していたのである。

以上に述べた、中心と周縁の従属関係で構成された組織は、土地や領土を媒介することなく機能していたことが大越によって解明されている。スペイン統治以前のマヤ社会では土地は私有財産とは見なされず、誰がそこに人的エネルギーを投入しているかにより占有権が決定された。この仕組みを対人主義の原則といい、土地不動産を重視し財産とみなすヨーロッパの伝統的概念でありまた現代の常識でもある対地主義とは異なる（大越 2003:173）。

この対人主義を中心とした支配域概念は、ユカタン半島マヤ低地の地理条件、そしてそこから生まれた焼畑農法ミルパ(milpa)に深く根付いている。カリブ海底が隆起してできた石灰岩盤のどこまでも平坦なこの大地は、山脈や大河など自然の障害物がないため、土地の人々にとっては生活に必要な資源を求めてどこまでも移動することはたやすいことであった。また、半島中部から北部にかけては 1 年を通して水を湛える川も湖もほとんどなく、そのため水不足が居住場所を制限していたのではと考えられがちだが、実際にはマヤ人は雨季の豊富な雨水と、石灰岩層を流れる地下水をさまざまに利用して生活用水を確保してきた。地下の空洞に表土が陥没してできた深い穴、セノテ(cenote)や掘った井戸を通して地下水を汲み上げたり、バホ(bajo)やアグアダ(aguada)と呼ばれる雨季に水を蓄える低湿地の水を利用した。このように、マヤ低地は



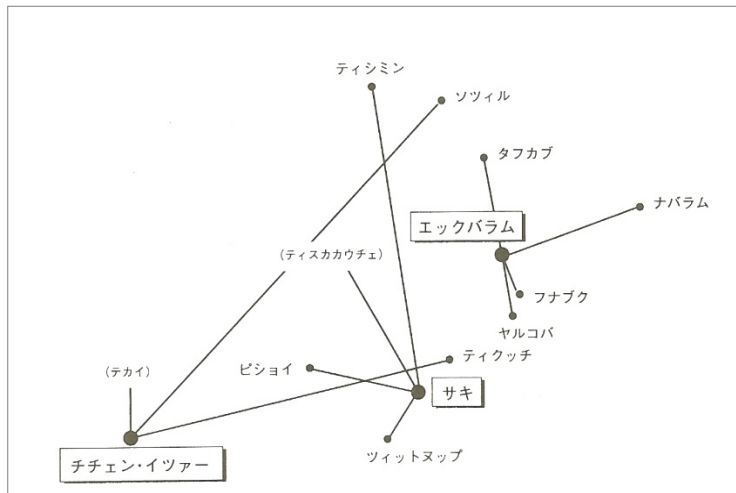
一見過酷な自然条件であるが、土地で生まれ育った人間は長年の知恵を駆使することで移動の自由を獲得したのである。

この地理条件と熱帯性気候のもとでは、農業条件は決してよくなかった。土壌は浅く栄養が乏しいので、占有してすぐに耕作できる農地はまず存在しない。そんななかでマヤ人が選択した農法はいくつかあるが、一般的な方法はやはりミルパであった。ひとつの拡大家族を養うだけの農産物を収穫するためには、森林の木々を切り倒し、焼き払い、広大なミルパ耕地を準備しなければならない。この作業には相当な男手が求められた。しかし、その耕地も2、3年後には養分が不足し十分な収穫が見込めなくなるため、土地を休ませ新たに広大な森林を焼き払わねばなくなる。したがって、同じ土地に代々居住し耕地を占有することによる農民の利点は少なく、結果として「開いた環境」のなか耕作地を求めての移動を余儀なくされたのである(Farriss 1984:118-119)。つまり、マヤの農民は土地に縛られてはおらず、土地を私有するという概念はもっていなかったのである。神々のものである神聖な土地の恩恵に与っていただけで、土地を自分たちの所有物、財産とは考えていなかった。

ミルパ農法の性質上、農民は1ヵ所に定着せず絶えず移動を繰り返す習性をもっていたが、直線的にどこまでも遠くに耕地を切り開いていったわけではなく、求心的存在を中心に一定の域内で動いていたと考えられる。マヤの農民は2、3年ごとに耕地を変え移動するが、8~12年経てば、最初に休耕させた自分が占有権を持つ土地が耕作可能になるのである。焼畑農法に適した土地とそうでない土地がある。適した土地を見つければ、わざわざ耕地を求めて遠くまでさまよう必要もない。農民も、ランダムに新たな土地を求めて動いているように見えても、実際には耕作地の移動は一定地域内で行われていたと考えるべきだろう。農民を支配下に置かねば貢納が得られず生きてゆけない貴族たちは、彼ら農民の移動パターンを尊重し、境界線を引くようなことをせず彼らの動きに柔軟に対応した。農民が動くため、統治者も土地ではなく人を管理せざるを得なかったのである。そのために、彼らに利を与えて彼らとのきずなを強めた。例えば、天文学や暦の知識を用いて農業に深く関わる天候、気候の情報を神のお告げと称して与え農業に貢献すると同時に、神々と交信できる自らが彼らの宗教的中心、心の拠り所となった。このようにして、農民がどこにいようと統治者は彼らと精神的なつながりを保つことができたので、自分に従う農民がいるところまでがこの統治者の支配域という認識をもつにいたったのである<sup>7</sup>。この認識が、最終的にはマヤ貴族の政治感覚に反映された。すなわち、臣下の支配域を大まかに把握することが重要であり、彼らとの距離を意識する必要がなかったということである。逆に臣下の立場からすれば、ある首長の近隣を統治しているからといってこれに属するとは限らなかったのである。例えば16世紀初頭にクプル家が統治した3政体を見ると、チチェン・イツァーに属する2つの共同体(ソツイル、ティクッチ)は首都チチェン・イツァーよりも別の政体の首都に近く、一見するとチチェン・イツァーとサキは領土が交

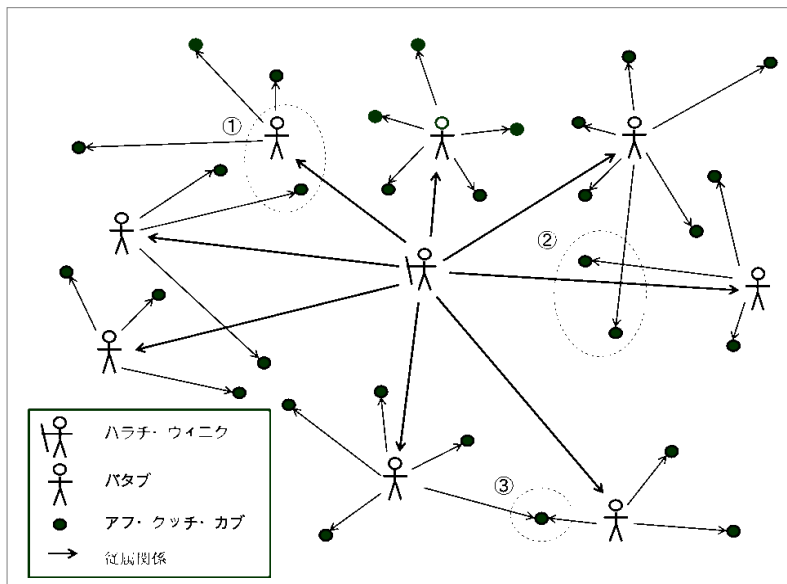
錯しているように見える（図 3）。しかし、土地を私有する概念をもたないマヤにあっては、これを連続した領土として捉えることはできないのである（大越 2005:140-141）。彼らの支配域とは、統治者が頭の中で描く「想像上の領土」であり、その支配空間は彼の臣下および従属統治者が治めるあたり、そして彼に従う農民が耕作しているあたりも含めた大ざっぱな理解をされているものだった。

図 3 16世紀初頭のクプル家の諸政体とその支配域



(出所) 大越(2005) 図 1

図 4 後古典期後期政治組織モデル



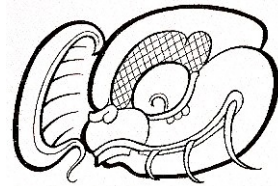
(出所) Gozawa (2009), 図 12 (一部修正)

\*点線で囲まれた部分は以下を表す ①従属関係に距離は関係ない ②境界線は存在しない ③同時に 2 人のバタブに帰属することもあり、一方から他方に寝返ることもあった

### III. 古典期カーン家とその従属国との関係

ではここで、カーン家の例をもとに、前述した後古典期後期の政治組織モデルを当てはめて分析してみよう。古典期マヤでもっとも強大な国のひとつを築いた一族カーン家は、「カーン」という読み方を表す蛇頭の「紋章文字」で知られ、これについてはティカルをはじめ多くの主要遺跡の碑文で言及されてきた(Grube 2004:117-119) (図5)。これら碑文の解読とその内容分析の結果、623年に古都カラクムルを占領、拠点を構えたこの血族は、多くの国々の統治者を従え、おそらく736年までその頂点に立っていたことが分かっている。カラクムル・カーン家の支配領域を考える上で、興味深い特徴が3つある。1) 従属諸国はカラクムルから遠く離れたところに拡散して位置していた、2) 従属統治者たちはカーン家の首長に自ら進んで協力していた、3) 従属統治者たちはカーン家に従いつつも、自らの勢力を自由に広げることができた、という点である。

図5 カーン家の「紋章文字」



(出所) Martin and Grube (2000), p.101

#### 1. 従属諸国とカラクムルとの距離

拠点がカラクムルに移って以降、ユクノーム・チェーン 2世(Yuknoom Ch'een II)の統治時代(636~686)にカーン家は従属関係のネットワークを最大限に広げる。彼以降、ユクノーム・イチャーク・カック(Yuknoom Yich'aak K'ak') (686~695〔推定〕)ユクノーム・トーク・カウィール(Yuknoom Took' K'awiil) (702以前~736〔推定〕)と続く3代100年の間この勢力圏を維持し、強勢を誇った(Martin 2005:1-2)。この時代、ナランホ、エル・ペルー、ドス・ピラス、ラ・コロナ、カンクエン、モラルなどの国々がカーン家に従属していた(Martin and Grube 2000:108-109)。これらの政体はいずれも首都であるカラクムルの近郊ではなく、直線距離で50キロメートルから、最も遠いカンクエンで245キロメートルも離れたところにあった。近代ヨーロッパ的概念で、カラクムルと従属国との間の空間を連続した領土と捉えれば、マヤ低地中南部はカーン家の一大帝国であったと単純に考えてしまいそうになる。しかし、この「領土」空間にはティカルなど多くの敵対国および非従属国が存在した。この事実を考慮すれば、連続した領土という考えは不自然であることがわかる。領土的つながりもなく、遠く離れていたにもかかわらず、多くの場合、地方の従属統治者はカーン家最高統治者に生涯忠義を尽くしたことが碑文データから分かっている。これはどういうことだろうか。ここで、後古典期後期の対人主義にもとづいた支配域概念を用いて考えてみよう。

首都と従属国との関係を、クッチカバルとバタビルの関係と照らし合わせてみると理解しうる。自らの支配権を安堵してもらった従属国の統治者は、カーン家を彼らの政治組織の中心と認めることで、カーン家の集合体に参加した。そしてカーン家は、遠心的なまなざしで従属統治者が治めるあたりまでを自分達の支配域と認識した。どんなに離れていようとも、間に敵対勢力が存在しようとも問題ではなかった。個人的つながりが維持されていて交流が保たれてさえいれば、貢納や労働力、軍事力の供出が期待できたからである。土地が痩せ農民が集住する農地などほとんどなかったマヤ低地で、中央と周縁との間の土地（ジャングルや藪など）を占領する必要性はなかったのである。

## 2. 地方統治者のカーン家首長に対する積極的従属

ドス・ピラス、エル・ペルーなどの従属国は積極的にカーン家に協力し、長年忠誠を誓い続けた。戦乱に明け暮れた古典期にあって、ドス・ピラスの統治者バラフ・チャン・カウィール(B'alaj Chan K'awiil)はじめほとんどの従属統治者は、カーン家が強大な間はこれを生涯裏切ることがなかった。また、他の政体からカーン家に寝返った例もある。カラクムルに拠点を移す以前、ツイバンチェを根拠としていた頃、カラコルの統治者ヤハウ・テ・キニチ 2世(Yajaw Te' K'inich II)は、当時従属していたティカルのムート（ムタル）(Muut / Mutal)家からカーン家に帰属先を変え、これがカーン家とティカルのムート（ムタル）家との戦争のきっかけとなった(Martin and Grube 2000:88-89)<sup>8</sup>。この傾向は、後古典期後期にクッチテールなど下部組織が戦略的に帰属先を変えていたことと同じ思想からきている。つまり、強い勢力の傘下に入る、もしくは鞍替えすることで自分とその血族の生き残りを図り、その利益と安全、勢力圏を守ったのである。カーン家のように当時日の出の勢いの政体には次々と中小国が他から寝返り、名声が広がり、そのおかげでますます求心力を増していったと推測できよう。最高統治者とそれに従う統治者との従属関係で成り立つ政治組織では、主従の個人的つながりが組織維持のための生命線であった。それ故に、カーン家は従属統治者の正統性を保障し支配権を安堵し、彼らのために戦った。一方で従属統治者は積極的にカーン家に協力し、互いにこのつながりを強化しようとしたのである。例えばドス・ピラスの建設者、前述のバラフ・チャン・カウィールは、ティカルのムート（ムタル）家内部の対立から 648 年に本家から別れた新興勢力であったため、ティカルと対決するための後盾が必要であった。そこで、当時ティカルに対抗しうる勢力を誇ったカラクムル・カーン家を頼り、軍事行動を共にするだけでなく、カラクムルを訪問し儀式に参加したりと頻繁に交流を図り互いのきずなを深めようと努めた。また、バラフ・チャン・カウィールは、カーン家から離反したために 631 年に攻撃を受け支配血族が途絶えたナランホの再建のために、彼の娘をカーン家の指示にしたがってナランホの新しい支配者として送り込んでいる(Martin and Grube 2000:74-76, 109-110)。こう

してその義務を積極的に果たし、その代わりにカーン家の軍事援助という大きな見返りを得、生き延びることができたのである。カーン家への派兵が義務であった証拠に、新生ナランホの統治者カック・ティリウ・チャン・チャーク(K'ak' Tiliw Chan Chaak)とその母(バラフ・チャン・カウィールの娘)も、ティカルとカーン家の間の戦争に派兵している(Martin and Grube 2000:76)。しかし、736年の対ティカル戦でユクノーム・トーク・カウィールが敗北、捕虜となり、おそらくティカルで生贖に捧げられて以降、カーン家に関する記述は他国の碑文にほとんど現れなくなる。このことは、後古典期後期同様この従属関係が脆く不安定であったことを意味している。主筋の勢力が弱くなれば、それまで傘下にあった国々はいとも簡単に主筋とのつながりを切ってしまうのである。弱りゆく中央血族のために忠誠を貫き死を賭して戦い抜くよりも、我が身とその家族の生き残りの方がマヤ貴族にとっては余程重要なのであった。

### 3. 従属統治者の勢力拡大の自由

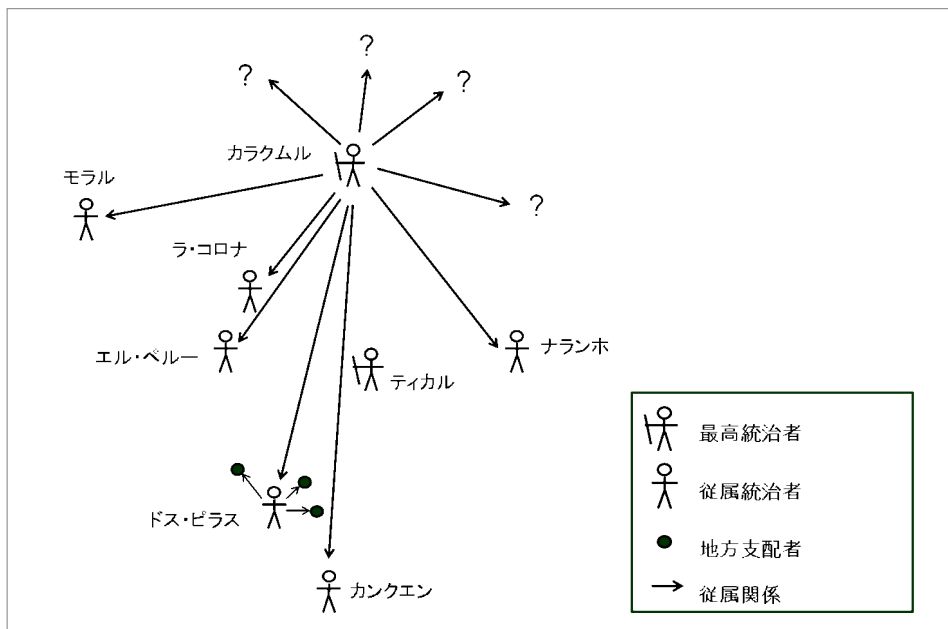
ドス・ピラスやナランホなどの従属国は、カーン家の支配域に属しながらも、一方で自らの支配域拡大を精力的に行っていたことが、それらの都市とその周辺都市の碑文から明らかになっている。例えばドス・ピラスのバラフ・チャン・カウィールは、近くのイツァンの支配血族の女性を妻に娶ることでこの地の血族との関係強化を図り、他方では彼の娘または妹をアロジョ・デ・ピエドラに嫁がせるなど近隣小国と多くの従属関係を築いた。その後近隣の宿敵セイバルを征服し、カーン家が滅んだと思われる736年の直前には同じくカーン家に従うカンクエンから妻を迎え、同国との結束を強めた(Martin and Grube 2000:61-62)。他方ナランホは、693年から716年までの一連の戦争で勝利した際、多くの政体に対して支配権を獲得した。例えば、カック・ティリウ・チャン・チャークはトゥーバルの支配血族から妻を娶り、またウカナルとヨーツの支配者の即位を後見した(Martin and Grube 2000:77)。

以上のような勢力拡大行為を、従属諸国はカーン家に黙って行っていたのであろうか。後古典期後期モデルを当てはめて考えれば、彼らの地元政治に中央の血族が口出しすることはなかったと推測できる。彼らの支配権は安堵されており、貢納や出兵などの義務さえ果たせば十分だったからである。領土を媒介とした主従関係なら主人から下賜された領土を拡大するには主人の了解がいるが、領土を介さない従属関係においては最高統治者に遠慮せずに自らの支配域を存分に拡大できたのではなかろうか。一方で、カーン家にとっても従属国の勢力圏拡大は遠心的まなざしで見れば自らの勢力圏拡大を意味していたので損にはならなかった。中央との結びつきを維持しつつも、従属国はこれを後盾として利用し、地方では自らがその地の求心的存在となろうとしたのである。

カーン家政治組織が以上のような特徴をもっていた理由を、後古典期後期政治モデルを使って説明することができた。その特徴を短くまとめれば、従属国を束ねる最高

血族の首長と従属統治者たちとの緩やかな双務関係が、政体としてのカーン家政治組織の骨格を成していたといえよう。そして、土地私有という概念が存在しなかった対人主義が浸透した社会だったからこそ、カーン家のように統治者どうしの従属関係を維持するだけで広範な支配域の頂点に長い間立ち続けることができたのである。従属国との物理的距離も問題ではないので、実際に直線距離で 245 キロメートル離れたカンクエンとの関係を、中間にティカルという強敵が存在したにも関わらず、この地の 3 代の統治者にわたって保ち続けることができたわけである (Martin and Grube 2000:109)。後古典期後期モデルと同じく、中央に君臨するカーン家にとっては「自分たちに従属している統治者が支配しているところまでが自分達の勢力範囲」だったのである。この言葉がそのままカーン家が認識する支配空間を表していた (図 6)。そして、その政体としての結束は政治的勢いと相関関係にあり、中央血族の勢力が強ければ結束は固く、弱まれば次々と従属国が離反していったのである。

図 6 古典期カーン家の支配空間 (紀元 690 年頃)



(出所) Gozawa (2009), 図 38 (一部修正)

#### IV. 古典期の庶民の動き

第 2 節では、農民がミルバ耕作のために絶えず移動する習性が後古典期後期の政治に深く影響していたことを見てきた。そして第 3 節では、古典期の政体も後古典期後

期と同じ政治的特徴をもっていたことを明らかにした。ここでは、古典期マヤの支配概念を知るうえでやはり欠かせない農民の特性がどのようなものであったかを考察する。

現在に至るまで、腐りやすい材質で作られた農民の住居跡や、彼らが使っていた土器などを発掘することは、条件さえ良ければ不可能なことではない。しかし、そこから当時の農民の暮らしぶりを再現することは、発掘データからだけでは難しい。また、古典期の石碑、壁画には農民に関する記述がまったくない。石碑や壁画は、統治者が彼とその血族、子孫のために作らせたものなので、自分達の記録しか残さない。カラクムルも例に漏れず、考古学・碑文データどちらからも農民に関する情報はまったく得られていないし、今後得られる可能性もほとんどない。そこで「アップストリーミング法」を活用し、空白である古典期カラクムルの農民情報に後古典期後期モデルを挿入してみる価値はある。古典期と後古典期で政治的特徴が一致したのであるから、その下部構造にある農民の特性も大差はないはずである。

カラクムルは先古典期後期の紀元前 400 ~ 200 年にはすでに政治・宗教の中心地として栄え、カラクムル最大のピラミッドである「建造物 2」の内部に現在では埋もれている初期建造物が、当時すでに存在していた(Carrasco Vargas 2000:5-6)。その後もカーン家滅亡まで都市としての発展を続けたこと、そしてエル・ミラドールはじめカラクムル周辺には大規模な遺跡が未発掘のものも含め集中していることなどから、それらの統治者と貴族のための食料を供給し、巨大建造物建設のために労働力を提供していた農民の人口は多かったであろう。この地域はバホに囲まれており、比較的生産性の高い土地であったため、人口が集中したと考えることができる。とはいえ、この地域で盛り土畑のように定住を促す集約農法の痕跡は現在まで確認されておらず、やはり農法は北部と変わらず焼畑であったと推測される。したがって、カラクムルでも農民は 2、3 年ごとに移動していたが、彼らにとって宗教的にも偉大な存在であったカラクムル・カーン家を彼らの求める中心として意識していたので、カラクムルからはるか遠くまで離れることなく一定地域を移動していたのであろう。もし対人主義による支配概念の根底である、焼畑農法に由来する農民の習性がカラクムルでも立証されることが将来あれば、後古典期後期と変わらぬ支配概念のもとでカーン家の政治組織が機能していたことが明確になり、さらにはマヤ低地全体でも同様であったと言う事ができるであろう。

以上のように、後古典期後期モデルを使えば、碑文では述べられないことのない庶民の大多数である農民の特徴を推測しうる余地が十分にある。庶民が存在してはじめて支配する側の貴族が存在する以上、政治組織研究には庶民の性質を把握することが欠かせないのである。

## おわりに

これまでも絵文書、石碑、壁画、壺絵等から概念を「読み取る」図像学的手法、現代のマヤ人村落の儀式、習慣などを忠実に記録する人類学的手法、マヤ文字テキストを解読し概念を解釈する碑文学的手法など、彼らの概念、宇宙観を発見、理解するために多くの手法が利用されてきた。これらに加え、先住民によりラテン文字を使ってマヤ語で書かれたものをはじめとする植民地期文書を利用した文献学的手法も、彼らの概念、宇宙観を発見するための重要な研究方法である。マヤ文書の内容を「当事者であるマヤ人にとっての行為の意味」を考え、またさらに「当事者であるマヤ人が文書を作成した意味」も考慮して分析することで情報源としての価値が一層増すのである。本研究により、後古典期後期モデルを古典期に「さかのぼらせる」手法が有効であることを確認できた。今回は貴族の側からの支配概念が中心となったが、政治・社会組織において同様に重要な要素である庶民に関しても、植民地期文書の研究がさらに進めば古典期の政治組織を一層明らかにすることができる。そのほかにも、古典期碑文の儀式など重要な場面によく描かれる女性統治者、女性貴族の政治における役割も、同文書から探し出すことが可能である。ただし植民地期には、カトリック教の影響で女性について書かれることがほとんどなかったので、その情報収集には恐らく時間を要するが、それだけの価値は十分にある。まずは後古典期後期マヤの概念および宇宙観をマヤ人の視点に近づけられる限り正しく理解し、彼らの概念を古典期の考古学・碑文データと比較する。これにより、考古学・碑文データだけでは解明できない古典期政治社会組織のデータの「穴埋め」および解釈の訂正が可能となるのである。

<sup>1</sup> 政体(polity)とは、固く強いまとまりを持つ国家とは異なる、緩い結びつきしかない、国家の定義にはあてはまらないが一定領域に政治支配を及ぼすものすべてを含めた広義の政治団体のことである。後に本文で触れるが、マヤの支配領域を国家と呼ぶことができないため本稿では「政体」または「国」という言葉を使う。

<sup>2</sup> この3分類は Sharer and Traxler(2006), 98 ページの考古学編年表に基づき、後古典期をより具体的に区切ったものである。後古典期の終わりは、地域によってスペイン人による征服が終了した年代が異なるため、「スペイン人による征服まで」としてある。

<sup>3</sup> 過去の政治組織モデルに関しては Culbert(1991)に詳しい。

<sup>4</sup> 「マヤの崩壊」とは古典期末期の人口増加による環境破壊、絶え間ない戦争、そして立てつけの旱魃などが原因で徐々に進行したマヤ低地中南部の大規模な人口減少および社会崩壊のことである。Coe(1999) 151-155 ページを参照。

<sup>5</sup> 大越氏との私信(2008年5月12日)。

<sup>6</sup> 大越氏との私信(2008年5月12日)。

<sup>7</sup> この概念は『カルキニ文書』内の土地境界設定に関する覚書に現れるマーナック(*manac*)とシュル(*xul*)というマヤ人の空間認識を表す重要表現から読み取れる。詳細は大越(2005), 141-146 ページを参照。

<sup>8</sup> キンタナ・ロー州南西部のツィパンチェ遺跡は、カラクムル以前のカーン家の拠点であり、このあたりが彼らの興隆の地である。詳細は Nalda(2004)、Gozawa(2009)を参照。ティカル支配血族はムートもしくはムタルという姓であった。詳細は Gozawa(2009), 77 ページを参照。



## 参考文献

- 大越翼(2003)「聖なる樹の下で - マヤの王を考える - 」(角田文衛・上田正昭監修、初期王権研究会編『古代王権の誕生Ⅱ東南アジア・南アジア・アメリカ大陸編』角川書店)169-205 ページ。
- 大越翼(2005)「対立と融合と - ユカタン・マヤ社会の王権の特質」(貞末 堯司編『マヤとインカ - 王権の成立と展開』同成社)139-152 ページ。
- Anderson, Benedict (2006), *Imagined Communities*, Revised Edition., New York, Verso (白石さや・白石隆訳『想像の共同体』NTT出版 1997年)。
- Arzápalo Marín, Ramón, ed. (1995), *Calepino de Motul, diccionario maya-español*, 3 tomos, México, Universidad Nacional Autónoma de México.
- Carrasco Vargas, Ramón (2000), *Proyecto arqueológico Calakmul, propuesta de exhibición de la subestructura II c, Calakmul, Campeche*, Informe no publicado del Instituto Nacional de Antropología e Historia.
- Coe, Michael D. (1999), *The Maya*. 6th Edition, London, Thames & Hudson (加藤泰建・長谷川悦夫訳『古代マヤ文明』創元社 2003年)。
- Culbert, T. Patrick, ed. (1991), *Classic Maya Political History, Hieroglyphic and Archaeological Evidence*, New York, Cambridge University Press.
- Farriss, Nancy M. (1984), *Maya Society under Colonial Rule: The Collective Enterprise of Survival*, Princeton, Princeton University Press.
- Gozawa, Keisuke (2009), “Reconstrucción de la organización sociopolítica maya: La dinastía Kaan”. Tesis de maestría. Chetumal, Universidad de Quintana Roo.
- Grube, Nikolai (2004), “El origen de la Dinastía Kaan” en Enrique Nalda (ed.) *Los cautivos de Dzibanché*, México, Instituto Nacional de Antropología e Historia, pp. 117-131.
- Landa, Diego de (1994), [1566] *Relación de las cosas de Yucatán sacada de lo que escribió el padre Fray Diego de Landa de la orden de San Francisco*. Estudio preliminar, cronología y revisión del texto de María del Carmen León Cázares, México, Consejo Nacional para la Cultura y las Artes.
- Miller, David, ed. (1989), *Enciclopedia del pensamiento político*, Madrid, Alianza Editorial.
- Martin, Simon (2005), “De serpientes y murciélagos,” *The PARI Journal*, 6 (2), pp.5-13, PARI online Publications. Mesoweb, <<http://www.mesoweb.com/pari/publications/journal/602/DeSerpientes.pdf>> (最終閲覧日 2009年12月15日)。
- Martin, Simon and Nikolai Grube (2000), *Chronicle of the Maya Kings and Queens, Deciphering the Dynasties of the Ancient Maya*, London, Thames & Hudson. (中村誠一監修『古代マヤ王歴代誌』創元社 2002年)。
- Nalda, Enrique, ed. (2004), *Los cautivos de Dzibanché*, México, Instituto Nacional de Antropología e Historia.
- Quezada, Sergio (1993), *Pueblos y caciques yucatecos, 1550-1580*, México, El Colegio de México.
- Roys, Ralph L. (1957), *The Political Geography of the Yucatan Maya*, Washington, Carnegie Institution of Washington.
- Sharer, Robert and Loa P. Traxler (2006), *The Ancient Maya*, 6th edition, Stanford, Stanford University Press.
- Schütz, Alfred (2003), *El problema de la realidad social*, Buenos Aires, Amarrortu.
- Velásquez García, Erik (2004), “Los escalones jeroglíficos de Dzibanché” en Enrique Nalda (ed.), *Los cautivos de Dzibanché*, I, México, Instituto Nacional de Antropología e Historia, pp. 79-103.

(社会学修士 / keisukego@hotmail.com)

# Concepto de dominio y espacio jurisdiccional de los mayas en el periodo Clásico –El régimen de los Kaan–

GOZAWA Keisuke\*

Hasta la década de 1950, prácticamente la única fuente de información para los que estudiaban la organización política maya en el Periodo Clásico eran los datos arqueológicos. Debido a que los investigadores no tenían otro instrumento para hacer suposiciones sobre dicha organización, usaban datos numéricos obtenidos a partir de los resultados de las excavaciones y calculaban así el número y volumen de los edificios, la cantidad de monumentos, de residencias y de plazas. También deducían la escala del sitio, su superficie territorial y su población. Con el avance del desciframiento de la escritura maya, a partir de los cincuenta, la historia de los linajes dominantes en los sitios principales se ha reconstruido drásticamente. No obstante, la organización política aún no está esclarecida ya que en los textos jeroglíficos no se habla de ésta sino de la historia relacionada solamente con los gobernantes y su linaje. Debido a esto, los investigadores han seguido apoyando sus hipótesis en datos de excavación además de tomar como referencia modelos de organización política de otras culturas como la europea, la africana o la del Sureste de Asia. A pesar de todos sus esfuerzos, estos investigadores no han podido comprender los conceptos y la cosmovisión con los que los mayas construyeron sus organizaciones, pues han estado obsesionados por su concepto europeo de Estado Moderno que establece que un Estado debe poseer un territorio designado por fronteras. Por otro lado, en el norte de la Península de Yucatán existen documentos escritos por los mayas durante el Periodo Colonial. Los mayas describieron su política e historia en maya yucateco utilizando el alfabeto del español con la finalidad de que los españoles aceptaran los derechos y privilegios de que gozaban sus gobernantes antes de la Conquista.

En este artículo se describe la problemática de las investigaciones previas acerca de la organización sociopolítica maya en el Periodo Clásico y se propone una nueva metodología basada en el análisis de los documentos coloniales a partir de los cuales se pueden extraer los conceptos sociopolíticos mayas del Periodo Posclásico que sirvieron para construir su modelo de organización política y ver cuáles eran los vínculos personales entre el gobernante y sus subordinados. También se aplica este modelo a los datos arqueológicos y epigráficos existentes sobre el linaje Kaan (el cual tuvo una gran influencia política en el Periodo Clásico estableciendo su base en Calakmul, Campeche) y, finalmente, se esclarece su régimen, su concepto de dominio y de espacio jurisdiccional.

---

\* Máster en ciencias sociales.